

Title	高齢者ケア施設における看取りのケアパスの開発
Sub Title	Developing an integrated care pathway for end-of-life care in long term care facilities
Author	深堀, 浩樹(Fukahori, Hiroki) 田口, 敦子(Taguchi, Atsuko) 宮下, 光令(Miyashita, Mitsunori) 山縣, 千尋(Yamagata, Chihiro) 松本, 佐知子(Matsumoto, Sachiko) 菅野, 雄介(Kanno, Yūsuke)
Publisher	
Publication year	2020
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	有料老人ホームなどの高齢者ケア施設の入居者と家族に対する終末期ケアの質向上のためのツールとして、4つの要素 (①終末期ケアに関する教育、②多職種で共通して活用できる構造化された記録用紙、③ ②で得られる情報を活用した定期的なカンファレンス、④ケア管理者による継続的な教育的支援)から構成されるEnd-of-Lifeケアツール (EOLケアツール) を開発した。介護職・看護職を対象とした調査により評価を行い、高齢者ケア施設の終末期ケアに有用であることが示唆された。 We have developed an intervention to improve end-of-life (EOL) care in long-term-care facilities, including fee-based homes for elderly. The intervention is named the EOL Care Tool. The EOL Care Tool consisted of four components: end-of-life care education, structured documents, regular conferences, and managers' support. We evaluated the EOL care tool by surveys for care workers and nurses. The results indicated that the tool is useful for EOL care in long-term-care facilities.
Notes	研究種目：挑戦的萌芽研究 研究期間：2016～2019 課題番号：16K15956 研究分野：老年看護学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_16K15956seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 2 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：3 2 6 1 2

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016 ~ 2019

課題番号：1 6 K 1 5 9 5 6

研究課題名（和文）高齢者ケア施設における看取りのケアパスの開発

研究課題名（英文）Developing an integrated care pathway for end-of-life care in long term care facilities

研究代表者

深堀 浩樹（FUKAHORI, Hiroki）

慶應義塾大学・看護医療学部（藤沢）・教授

研究者番号：3 0 3 8 1 9 1 6

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000 円

研究成果の概要（和文）：有料老人ホームなどの高齢者ケア施設の入居者と家族に対する終末期ケアの質向上のためのツールとして、4つの要素（終末期ケアに関する教育、多職種で共通して活用できる構造化された記録用紙、得られる情報を活用した定期的なカンファレンス、ケア管理者による継続的な教育的支援）から構成されるEnd-of-Lifeケアツール（EOLケアツール）を開発した。介護職・看護職を対象とした調査により評価を行い、高齢者ケア施設の終末期ケアに有用であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多死社会を迎える日本では、病院での在院日数の短縮化や家族形態の変化などの要因のため、高齢者ケア施設における質の高い終末期ケアが求められている。しかし、高齢者ケア施設における終末期ケアには、スタッフの知識・技術不足、多職種の間でのコミュニケーションの難しさなど課題が多い。さらに、わが国では、高齢者ケア施設の終末期ケアの質向上のための取り組みを学術的な視点で検討している研究は乏しかった。本研究は、新たに開発したEOLケアツールが高齢者ケア施設での終末期ケアの質向上に有用である可能性を学術的に示した点で学術的意義を有し、高齢者ケア施設の終末期ケアの改善に貢献するという社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：We have developed an intervention to improve end-of-life (EOL) care in long-term-care facilities, including fee-based homes for elderly. The intervention is named the EOL Care Tool. The EOL Care Tool consisted of four components: end-of-life care education, structured documents, regular conferences, and managers' support. We evaluated the EOL care tool by surveys for care workers and nurses. The results indicated that the tool is useful for EOL care in long-term-care facilities.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者ケア施設 終末期ケア Integrated care pathway

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

多死社会を迎える日本では、病院での在院日数の短縮化や介護家族の高齢化・家族形態の変化による介護者の不在、介護困難などの要因のため、在宅や高齢者ケア施設などの地域における質の高い終末期ケア（エンド・オブ・ライフ・ケア（以下 EOL ケア））が求められている。

しかし、高齢者ケア施設における EOL ケアには課題が多いことを我々は研究開始当初に認識していた。例えば過去の研究を概観し、高齢者ケア施設において、EOL ケアに関するスタッフの知識・技術不足、多職種の間でのコミュニケーションの難しさ・情報共有不足、家族とスタッフとのコミュニケーション不足などが、入居者や家族への EOL ケアの質向上を妨げていると考えていた。また、わが国では、高齢者ケア施設における終末期ケアの必要性は強く認識されており、終末期ケアの質向上のための様々な資料や取り組みが存在するものの、実証研究によりそれらの効果や普及性を検討した研究は限られているとも認識していた。

そうした中、我々は、EOL ケアの質向上のための手段として、スタッフへの教育や多職種で共通して用いる記録用紙、日常的に行われるケアの質の監査と教育的な支援などを組み合わせた介入（複合介入）の有効性に着目していた。これは Integrated Care Pathway と呼ばれる介入で、多職種が参加するケアの流れに合わせ、行うべきケアなどをまとめた記録形式を用いて、職員への教育や定期的なカンファレンスを組織的に行ないケアの質の向上を目指す取り組みを指している。EOL ケアにおける ICP の効果として、我々は先行研究を概観し、終末期に生じる症状のアセスメントの充実、身体的・精神的な幅広いニーズへの対応スキルの向上、終末期ケアを提供するうえでの自信の向上、ケアスタッフのコミュニケーション能力や尊厳への意識の向上、家族への精神的サポートの向上、家族とスタッフとのコミュニケーションの改善といったものがあることを認識していた。

上記のような背景から、我々は、高齢者ケア施設における終末期ケアの質向上のための取り組みの学術的根拠に乏しいわが国において、終末期ケアの質を向上するためのツールを開発し、その評価を学術的に行うことが高齢者施設の高齢者及び家族に対して提供される終末期ケアを向上させることにつながると考えた。

2．研究の目的

本研究の主たる目的は、高齢者ケア施設における終末期ケアの質の向上のためのツール（これを EOL ケアツールと呼称する）を開発し、その有用性や実行可能性を評価することであった。また、高齢者ケア施設での活用を促進するために、実践現場で活用できる記入例などを含むマニュアルの開発も行った。

3．研究の方法

（1）終末期ケアの質向上のためのツール（EOL ケアツールの開発）

高齢者ケア施設における終末期ケアの質向上のためのツールを開発するために、高齢者ケア施設における終末期ケアに関する国内外の文献検討や、研究者、看護・介護の実践家の協議を継続的に複数回実施した。

（2）EOL ケアツールの有料老人ホームでの活用と評価

有床診療所を併設する介護付き有料老人ホーム 1 施設において EOL ケアツールを活用し、介護職・看護職、および管理者を対象としてアンケート調査（量的調査）、グループインタビュー（質的調査）により EOL ケアツールの評価を行った。活用を行った介護付き有料老人ホームは、比較的自立している人が生活する「一般居室」、常時介護を要するようになった人が生活する「介護居室」があり、入居者は併設されている「有床診療所」に入院することもできる。EOL ケアツールはこの 3 つの部門で活用され、3 部門で勤務している介護職・看護職・管理者を評価のための調査の対象とした。

（3）EOL ケアツールの修正とのマニュアル開発

（2）の評価を踏まえ、研究者と実務者で複数回の検討会議を行い、EOL ケアツールを高齢者ケア施設において、安全に効果的に使用していくためのマニュアルを開発した。

4．研究成果

（1）終末期ケアの質向上のためのツール（EOL ケアツールの開発）

終末期ケアに関する国内外の文献検討の結果、高齢者ケア施設での終末期ケアの各国の状況を示す文献、高齢者ケア施設での終末期ケアの特徴や看護職・介護職の役割を示す文献、高齢者ケア施設での終末期ケアの課題に関する文献、高齢者ケア施設での終末期ケアの質向上を目指した介入研究、といった文献が検討の対象となった。

研究者、看護・介護の実践家の協議においては、文献検討の内容を踏まえ、入居者や家族の意向や尊厳を尊重するための教育や方法のあり方、実践家にとって使いやすかつ根拠に基づいた記録用紙やカンファレンスのあり方、この研究活動の入居者・家族・実践家への説明のあり方などについて議論が行われた。

上記を経て、4 つの要素（終末期ケアに関する教育、多職種で共通して活用できる構造化された記録用紙、得られる情報を活用した定期的なカンファレンス、ケア管理者によ

る継続的な教育的支援)から構成される EOL ケアツールを完成させた。開発した EOL ケアツールに含まれる「構造化された記録用紙」の一部を図 1 に示す。この箇所は、EOL ケアツールを用いて、終末期ケアを開始する時点(おおよそ要介護認定を受ける程度の状態)という早期より入居者の価値観や望み、不安を把握することを目指したものである。これらを把握するためのコミュニケーションや関わりを長期にわたり繰り返し行うことで、心身や疾患、生活の状況の変化とともに変わる価値観や望みを継続的に把握でき、質の高い終末期ケアを行うことにつながると期待された。その他、高齢者ケア施設での終末期ケアの特性を踏まえ、悪化や改善を繰り返し替えず高齢者の心身の状態の変化を多職種で丁寧に検討するためのカンファレンスのための書式、死が近いときに高齢者の症状や苦痛を緩和したりするためのケアが適切に行われることを促進する記録用紙などが構造化された記録用紙には含まれていた。

(2) EOL ケアツールの有料老人ホームでの活用と評価

活用状況

本研究のデータ収集期間における EOL ケアツールの活用状況を説明する。EOL ケアツールは一般居室において 73 名、介護居室において 44 名、有床診療所において 17 名のケアにおいて活用された。

アンケート調査による評価

EOL ケアツールの評価のため、研究開始前、終末期ケアに関する教育終了後、EOL ケアツール使用開始後 3 か月、EOL ケアツール使用開始後 9 か月の時点で看護職と介護職を対象としたアンケート調査を実施した。分析の結果、特に看護職において終末期ケアに対する態度と多職種連携が改善されたことを示す結果が見いだされた。また、看護職・介護職ともに、EOL ケアツールの有用性を高く評価しており、特に看護職でその傾向は顕著であった。

グループインタビューによる評価

グループインタビューでも、終末期ケアへの意欲や責任感の増加や、多職種連携の改善といった EOL ケアツールの有用性を示すデータが得られた。それと同時に EOL ケアツールを活用していく上での阻害要因を示すデータ(業務負担の増加や、書式の改善点の指摘等)も得られ、今後の EOL ケアツールの改善に有益なものと考えられた。

(3) EOL ケアツールの修正と普及のためのマニュアル開発

(2) の評価結果に基づき、実践現場での活用するためのマニュアルを開発した(図 2)。図 2 はマニュアルの中で、EOL ケアツールの目的や構成要素を説明したページから一部を抜粋したものである。マニュアルの開発にあたっては、得られたデータに基づき有用性を維持しつつも阻害要因となりうる業務負担や書式の改善点の改善を図った。また実践家の理解を促進するため、研究メンバーである有料老人ホームの介護職・看護職の経験知に基づき、終末期を過ごす有料老人ホームの入居者の架空の事例を作成し、理解しやすい記入例を含めた。

アセスメントシート		記載日: 20 年 月 日
入居者氏名:	種 年齢:	性別: 男・女
要介護度:	居室: 一般居室・介護居室・クリニック	
アセスメントの期間 (1 年毎・6 か月毎・3 か月毎・1 か月毎・1 週間毎)		
最終確認者:	受け持ちスタッフ:	
A. 入居者の価値観やエンド・オブ・ライフケアに関する望みや不安など ※過去の検査や診断に基づく情報はそのことがわかるように記載		
項目	情報	
入居者の好みや大切にしている価値観	確認・未確認(具体的な内容を記載)	
エンド・オブ・ライフケアに望むこと	確認・未確認(具体的な内容を記載)	
エンド・オブ・ライフケアへの不安や悩み	確認・未確認(具体的な内容を記載)	
補足事項・その他の重要な情報		
B. 入居者の認知機能の評価		
項目	情報	
認知機能の評価	認知機能障害(あり診断名: _____・なし)・未確認 認知症高齢者の日常生活自立度 (I・IIa・IIb・IIIa・IIIb・IV・M)	

図 1 構造化された記録用紙の一部

I. エンド・オブ・ライフケアツール (EOL ケアツール) とは

- EOL ケアツールは、高齢者ケア施設の入居者の EOL ケアの質を維持・向上することを目的とし、入居時から逝去時まで、入居者や家族の価値観や意向を取り入れて、根拠に基づき標準化された質の高い EOL ケアを提供し続けることを目指して開発されました。
- EOL ケアツールでは、スタッフは EOL ケアに関する教育を受け、その後、教育担当者によるサポートを受けながら、多職種共通のチェックリストの使用と定期的なカンファレンスを実施していきます。

<EOL ケアツールの構成要素>

要素	内容
EOL ケアに関する教育	EOL ケアの基本的な考え方、痛み・症状マネジメント、グリーフケアなど EOL ケアに関する講義(約 60 分間 6 回)の受講
多職種共通のチェックリストの使用	介護職・看護職が共通して使用できる入居者の考えや希望、身体・精神的状態、EOL ケア提供状況などを記載する記録用紙
定期的なカンファレンス	チェックリストを用いた EOL ケアの課題等に関する、介護職、看護職、多職種での定期的な話し合い
教育担当者による教育的サポート	ツール運用や EOL ケアに関するサポート(教育担当者は主に各ケア部署の課長が担当)

図 2 マニュアルの一部

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山縣千尋, 深堀浩樹, 廣岡佳代, 菅野雄介, 田口敦子, 松本佐知子, 宮下光令.	4. 巻 13(4)
2. 論文標題 高齢者ケア施設におけるエンド・オブ・ライフ・ケアのIntegrated Care Pathwaysに関する介入・実装研究 スコーピングレビュー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Palliative Care Research	6. 最初と最後の頁 313-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山縣千尋, 深堀浩樹, 廣岡佳代, 菅野雄介, 田口敦子, 松本佐知子, 宮下光令.
2. 発表標題 高齢者ケア施設におけるエンド・オブ・ライフ・ケアの Integrated Care Pathwaysに関する介入・実装研究 スコーピングレビュー
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山縣千尋, 安達美由紀, 徳重敬子, 西田美紀子, 増田和, 松本佐知子, 深堀浩樹.
2. 発表標題 有料老人ホームにおけるEnd-of-Lifeケアツールの開発と有用性の評価
3. 学会等名 第17回聖隷福祉学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢津剛, 白川美弥子, 神山芳美, 沖永美幸, 藤春千恵美, 佐伯由美, 田口敦子, 菅野雄介, 深堀浩樹, 宮下光令.
2. 発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第1報）- チェックリストの作成プロセス -
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

1．発表者名 田口敦子，鎌田彩希，白川美弥子，矢津剛，神山芳美，沖永美幸，藤春千恵美，佐伯由美，菅野雄介，深堀浩樹，宮下光令．
2．発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第2報）－チェックリスト使用前後の評価－
3．学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 白川美弥子，矢津剛，神山芳美，沖永美幸，藤春千恵美，佐伯由美，田口敦子，菅野雄介，深堀浩樹，宮下光令．
2．発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第3報）－実行可能性の評価－
3．学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 山縣千尋、廣岡佳代、菅野雄介、田口敦子、松本佐知子、宮下光令、深堀浩樹
2．発表標題 高齢者ケア施設におけるエンド・オブ・ライフ・ケアのIntegrated Care Pathwaysに関する介入・実装研究：スコーピングレビュー
3．学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 矢津剛、白川美弥子、神山芳美、沖永美幸、藤春千恵美、佐伯由美、田口敦子、菅野雄介、深堀浩樹、宮下光令
2．発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第1報）－チェックリストの作成プロセス－
3．学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4．発表年 2018年

1. 発表者名 田口敦子、鎌田彩希、白川美弥子、矢津剛、神山芳美、沖永美幸、藤春千恵美、佐伯由美、菅野雄介、深堀浩樹、宮下光令
2. 発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第2報）－チェックリスト使用前後の評価－
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白川美弥子、矢津剛、沖永美幸、藤春千恵美、佐伯由美、神山芳美、鎌田彩希、田口敦子、菅野雄介、深堀浩樹、宮下光令
2. 発表標題 在宅緩和ケアの質担保に向けたチェックリストおよび教育プログラムの開発（第3報）－実行可能性の評価－
3. 学会等名 第23回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	田口 敦子 (TAGUCHI Atsuko) (70359636)	東北大学・大学院医学系研究科・准教授 (11301)	
研究 分担者	宮下 光令 (MIYASHITA Mitsunori) (90301142)	東北大学・大学院医学系研究科・教授 (11301)	
研究 協力者	山縣 千尋 (YAMAGATA Chihiro)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・大学院生 (12602)	

6 . 研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松本 佐知子 (MATSUMOTO Sachiko)	社会福祉法人聖隷福祉事業団・藤沢エデンの園一番館・副園長	
研究協力者	菅野 雄介 (KANNO Yusuke)		